

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00116

研究課題名(和文) オーギュスト・コント『実証哲学講義』の歴史的意義をめぐる学際的研究

研究課題名(英文) A Historical Analysis of Auguste Comte's "Cours de la philosophie positive"

研究代表者

安孫子 信 (Abiko, Shin)

法政大学・国際日本学研究所・研究員

研究者番号：70212537

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：コントの実証哲学が「理性」や「真理」を哲学の表舞台から退場させ、形而上学的哲学を駆逐して、現代哲学をもたらしたとして、その作業を完遂したのが『実証哲学講義』でした。しかし同書はきわめて浩瀚である上に、一見して諸科学に及ぶ科学史を扱っているだけで、そこに哲学を把握していくことは容易ではありません。本研究では、コントを知る内外の哲学、社会学、科学史の専門家を糾合して、グループで、多角的に、徹底して同書を読むことを遂行して、コントが、科学と科学史が持つ、ある意味で科学と科学史を超える哲学的な力を社会学の名の下で取り出しき、その力の上に新しい哲学を打ち立てたことを明らかにしました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

科学の進歩が、人間に恩恵と同時に深刻な問題をもたらしていることは否定できません。その問題を前に、科学を万能として科学主義を掲げることはいけません。しかし、他方で科学の達成を否定して、反科学を主張することも出来ないでしょう。われわれは今日、科学にどう向き合い、科学をどう扱っていくべきか。すでに科学の時代であった19世紀、当時の科学の進歩の全体を引き受け、この問題に取り組んだのがコントです。コントは社会学と実証哲学の創出という形で、その問題に一定の回答を与えました。それは、数学・物理学的科学に、生物学と社会学とを重ね合わせることで、科学に科学を乗り越える力を見出していこうとするものでした。

研究成果の概要(英文)：Auguste Comte's "Cours de philosophie positive" (1830-42) has brought modern philosophy to the forefront by removing "reason" and "truth" from the stage of philosophy and by eradicating metaphysical philosophy. However, the book is extremely voluminous (in 6 volumes), and at first glance, it only deals with the history of science, which covers various sciences, so it is not easy to grasp the philosophy in the book. In this study, we brought together experts in philosophy, sociology, and the history of science who were familiar with Comte from Japan and abroad to read the book thoroughly and collectively from multiple perspectives, and we found that Comte has extracted in the name of sociology the philosophical power that science and the history of science have over science and the history of science in a sense, and has built a new philosophy, named positivism, on that power.

研究分野：思想史

キーワード：実証哲学 実証主義 科学哲学 科学史 オーギュスト・コント 『実証哲学講義』 三状態の法則
分類の法則

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

オーギュスト・コント(1798 - 1857)は自らの仕事の全体を「科学を哲学とし、哲学を宗教とする」ことであつたと要約している。その言葉にしたがえば、彼は科学を哲学へ導き、さらに哲学を宗教へともたらしめたことになる。彼が科学としての「社会学」を創始し、また哲学としての「実証哲学」を創始し、さらに宗教としての「人類教」を創始したことは事実である。最初の「科学を哲学とする」ことは、第一の主著『実証哲学講義』(1830 - 42)で、「社会学」の構築を通して「実証哲学」を完成させることで実現された。また、次の「哲学を宗教とする」ことは、第二の主著『実証政治体系』(1851 - 54)で、「実証哲学」を「人類教」へと結ぶことで果たされた。

コントの仕事がそのようだったとして、その展開全体を統合的に理解することは、実は容易ではない。それは、コントが途上で得た信奉者の多くが、その後、彼から離反していったことからもうかがわれる。人がコントでつまづくのは、なにより、哲学を宗教へとつなぐ第二のステップにおいてである。ただ離反はすでに、科学を哲学へとつなぐ第一のステップにおいても生じていた。コントの「社会学」は、知の歴史的な変化を社会現象として扱う一つの科学であり、観察の結果として、知の進歩を「神学的」「形而上学的」「実証的」の三段階に分かつ「三状態の法則」と、知の対象を六つに分け、科学をそのそれぞれを扱う「数学」・「天文学」・「物理学」・「化学」・「生物学」・「社会学」の六つに分かつ「分類の法則」を主張している。この二法則に即して述べれば、つまづきが生じるのは、まず、第一に、「三状態の法則」が、一見したところ、宗教(「神学的」) 哲学(「形而上学的」) 科学(「実証的」)という知の進歩を説いているにもかかわらず、彼の仕事は、科学 哲学 宗教(「科学を哲学とし、哲学を宗教とする」)と進んだからであり、また、第二に、「分類の法則」が、諸科学をその対象の普遍性 特殊性の度合いによって、並べ、最も普遍的な「数学」を出発点に置きながら、「数学」に他の諸科学を帰着させようとするのではなく、最も特殊な「社会学」に他の諸科学を総合する役割を与えようとしたからである。

「科学を宗教に」ということも、「数学ではなく社会学を」ということも、まさに「実証哲学」の名の下でコントが主張したことであつたが、コント以降、今日に至るまでの実証主義は、「宗教や哲学を廃して科学に」を主張し、しかもその際に科学として持ち出されるのは、「社会学などではなく数学(論理学)」なのであつた。こうして、今日までの実証主義は、創始者コントを否認している。それは、コントの「実証哲学」が自己矛盾しており、実証主義にもとるものだったからなのか。そうであるかもしれない。しかし事実として、そのことは徹底的には考究されずに、問題は開いたまま残されてきたと言えよう。コントの「実証哲学」、つまり彼の『実証哲学講義』も『実証政治体系』も、読まれることなく、理解されることなく、打ちやられてきたというのが真相であろう。この状況をアランは、「コントに対する忘恩は私たちの時代に一般的な事実であるが、それは主として彼の学説が人の決して無視しえないような学説に属するということから生じるものである」(『イデー』)と述べている。最近の Robert C. Scharff, *Comte after Positivism*, Cambridge University Press, 2010 は、コントを実証主義の創始者とはせず、逆説的にむしろ実証主義の後に来た思想家とみなすことで、コントの「実証哲学」の真意の理解を試みようとしている。説得的な仕事ではあるが肝心の「社会学」(「科学を哲学にする」)が十分には語られていないように見える。コントの「実証哲学」とは何だったのか。それは統合的に理解される代物なのか。われわれはまだこの問いの前に佇んでいると言えよう。

2. 研究の目的

本研究では対象を『実証哲学講義』にしぼり、(1)それを何より丁寧に読むこと、そして、(2)哲学史と科学史を踏まえつつ、それにできるだけ統合的な理解と解釈を与えること、を目指した。そうすることで、とくに科学と哲学との関係で、さらに自然諸科学と社会学との関係で、コントの「実証哲学」が科学哲学としてわれわれを当惑させ続けている問い、すなわち、「実証哲学」を名乗りながら、それはなぜ哲学を解消して科学に向うことをしなかったのか(なぜその反対を行ったのか) また、さらに、科学を言いながら、それはなぜ諸科学を数学に帰着させることに向わなかったのか(なぜその反対を行ったのか)を、単に時代状況からではなく、哲学的に解決することを目指した。そのようにして、最終的には、『実証哲学講義』が有する、今日にも通じる、哲学的な意味を明らかにしようとした。その際に手引きとなったのは、ニーチェの「科学的方法の歴史は、オーギュスト・コントによってほとんど哲学自身とみなされた(『権力への意志』)」という言葉である。この言葉を単に皮肉である以上に、コント「実証哲学」の本質を言い当てているものと見なした。

(1)『実証哲学講義』を丁寧に読むということでは、原語テキストの初版が未だに批判校訂されずに、間歇的にであるが、ただ組み方だけを替えて、何度か再版されてきているその状態を、正確に把握することを目指した。また、その日本語訳テキストが実質的に存在していない状況を打破するために、文字通りの全訳は無理だとしても、内容の根幹を伝える主要部分(分量としては全体の半分強)をできるだけ正確に、わかりやすく日本語に移すこと、そしてそれを出版する

ことを目指した。

(2) 『実証哲学講義』の統合的な理解や解釈ということでは、「三状態の法則」と「分類の法則」が根本的に含んでいる、哲学と科学との関係、あるいは、社会学と自然諸科学との関係にかかわる主張を、徹底して検討することを目指した。その枠組みの中で、扱われていったのは、たとえば次のような問題である。そこで数学は言語・記号なのか、科学なのかという数学の身分の問題。数学的存在、たとえば微積分における無限小や極限の身分の問題。天文学の探求を太陽系に限るといった科学的立場の問題。物理学、とくに光学における粒子説と波動説の扱いの問題。化学における原子や分子仮説の扱いの問題。化学の数学化の問題。生物学における生命や死の解釈、つまり、生氣論と機械論をめぐる議論の問題。生物学における環境の問題。生物学における分類と進化の問題。骨相学における心身問題の扱いの問題。社会静学の位置と内容の問題。社会動学における「三状態の法則」の実証性の問題。社会学で標榜される主観的方法と、その哲学的射程の問題。これらをテキスト内在的に、さらには科学史や哲学史に置いて外在的に検討し、それぞれに一定の答えを与えることを目指した。

3. 研究の方法

『実証哲学講義』の全6巻を前半と後半に二分し、それに対応させて、研究分担者・研究協力者も二分して、前半3巻を扱う「自然科学」チーム(4名)と、後半3巻を扱う「社会科学」チーム(5名)を構成した。その上で、それぞれのチーム中で、テキスト翻訳と検討問題の分担を決めて、それぞれの仕事の進捗を、順に、隔週で開催の研究会に持ち寄って報告し、報告内容を相互に批判検討することを行っていった。そのようなルーチンとしての会に加えて、夏と春の休みには合宿形式で集中的な検討を行うこと、また年に一度、海外からも研究協力者を招聘して、検討・議論のワークショップを行うことも企画した。コロナ禍の発生後も隔週の研究会は遠隔zoomで維持されていったが、合宿や国際ワークショップについては、計画通りに実施することはできなかった。とくに国際ワークショップは、研究期間4年の初年度と最終年度の2回の開催に留まった。以下にワークショップの内容を記す。

2019年ワークショップ

日時：2019年12月12日・14日

場所：法政大学

(第一日)

「オーギュスト・コントの生物学の哲学」

1. ロラン・クロザッド (カーン大学):

『実証哲学講義』から『実証政治学体系』へ：コント生物学の何が変わり何が変わらなかったのか

2. チエリー・オケ (パリ・ナンテール大学):

原因の不可能な認識：ダーウィンとコント・エピステモロジーの影

3. 川名雄一郎 (早稲田大学):

生まれか育ちか？ 人間本性と社会をめぐるJ・S・ミルのA・コントへの応答

(第二日)

「ロラン・クロザッド『思考の器官』を読む」

1. 松井久 (明治大学)

一部「脳生理学と人間精神の研究」、二部「骨相学の哲学」

2. 石渡崇文 (東京大学)

三部「社会学的骨相学」

3. 長谷川悦宏 (法政大学)

四部「脳の理論と道徳」

2023年ワークショップ

日時：2023年3月10日・11日

場所：法政大学 (部分的に遠隔zoom実施)

「オーギュスト・コント『実証哲学講義』の真の哲学的射程について」

(第一日)

1. 杉本隆司 (明治大学):

「コント実証政治の信頼の理論」

2. 小野浩太郎 (リヨン・カトリック大学)

「コントとベルクソン-産業と民主主義」

3. 松井久 (明治大学)

「コントの環境論とW.ジェームズの心理学」

4. アニー・プティ (モンペリエ大学)

「コント『実証哲学講義』の歴史的射程-緊張と逆説」

5. ロラン・クロザッド (カーン大学)

「コントの仕事における人間精神の研究 哲学のアポステリオリな体系化」

6. 米山優 (名古屋大学)

「実証哲学における言語理論」

(第二日)

1. トナティウ・ウセシェ・サンドバル (リヨン・アカデミー)
「科学を経由してローマへ」
2. 平井正人 (東京大学)
「社会的知的統治」
3. チエリー・オケ (パリ・ナンテール大学)
「生物科学の真の精神」
4. 安孫子信 (法政大学)
「コント社会学の二法則の哲学的射程」
5. ミシェル・ブルドー (科学技術・歴史哲学研究所)
「科学が哲学になるとは」

4. 研究成果

まず、『実証哲学講義』の日本語訳の作業は、長文・悪文で知られるコントのフランス語を相手に難航を重ねてきた。しかし、予定している大きな2巻(第1巻「自然科学篇」と第2巻「社会科学篇」)のうち、第1巻については共訳者による翻訳作業は終了し、監訳者による調整の段階に入っている。調整が終われば訳稿は出版社(法政大学出版局)に提出されることになる。第2巻は共訳者による翻訳作業が終盤に差しかかっているものの、もうしばらく継続されていく。それが終了すれば、やはり監訳者の調整が行われて出版社に持ち込まれる。いずれにしても、本邦初の『実証哲学講義』の翻訳作業は、この間に実質的な進捗を果たした。

つぎに本来の、『実証哲学講義』についての研究成果を、共同研究者それぞれの仕事ということになるが、先にあげた研究課題と対応させて列記していく。記号論が『実証哲学講義』では持たなかった重みをその後、『主観的総合』に至るまで、持ち続けていったことの意味の確認。力学を物理学ではなく数学の一部としていくなど、力学においてラグランジュに従って、いわばニュートン離れしていった理由と意味の確認。天文学でラプラスから離れて行った理由と意味の確認。物理学や化学において実証的仮説を容認していった理由と意味の確認。反対に、物理学や化学において、形而上学的存在(原子や分子)を排除していった理由と意味の確認。化学も数学から切り離そうとする、数学の普遍性への懐疑の理由と意味の確認。生死を対立させず、生氣論と機械論のいずれにも傾いていかない実証的生命論の理由と意味の確認。独立した論をすでに形成していると言ってよい環境論が展開されている理由と意味の確認。進化論が退けられた理由と意味の確認。正常と異常の精神病理学も視野に入れた場合の、骨相学における心身関係についての立論の理由と意味の確認。社会動学の出発点(フェティシズム)と結びつけて見た場合の、社会静学の存在の理由と意味の確認。循環の問題を始め歴史的方法が内部にはらむ緊張と逆説の理由と意味の確認。信の観点から見た場合の、社会学の主観的方法や社会学そのものの存在の理由と意味の確認。これらの多くは、2023年の総括のワークショップで取り上げられた。このワークショップの報告集(アクト)の電子版が近日にコント研究所(Maison d'Auguste Comte)の公式ページで公開される予定である。

以上一連の研究成果は、それぞれ、『実証哲学講義』のごく一部分に関わるだけのものである。しかし、そのどれを取っても、「実証哲学」を完成させる「社会学」の根本法則、すなわち、「三状態の法則」と「分類の法則」の適用例、あるいは立証事例となっていて、この二法則を強化しつつ説明している。すなわち、もっとも端的には「からとなるが、「三状態の法則」は「神学的」「形而上学的」「実証的」という三状態を経る知の進歩を言うが、その三状態で知の真偽を問題とはせず、そのどの状態も、歴史の一定の段階で社会にふさわしいものであったとする。三状態のどれもが、それが対応している社会で、信頼(信)を形成しているのである。こうして、神学的宗教とは別に、科学に基づく実証的宗教というものもそれは垣間見ている。つまりコントの「実証哲学」においては、科学は宗教を放擲せず、むしろ宗教とつながっていくのである。また、たとえば、やはり「からとなるが、「分類の法則」は「数学」の普遍性、「天文学」以下の諸科学の特殊性を言うが、ここで特殊性は普遍性に依存はするものの、普遍性には包摂されず、普遍性から演繹もされない。「数学」を知らずに「天文学」を行うことは出来ないが、「数学」は扱わない新たな経験から、そしてその経験に即した新たな特殊法則から、「天文学」は成立していく。こうして、最後の「社会学」は先行の5科学すべてに依存するが、それらにはない経験とその経験に即した特殊法則(「三状態の法則」と「分類の法則」)から成立していくことになる。このとき、「社会学」は他の5科学すべてを踏まえるということから、それら諸科学を結果として総合することになる。つまり、コントの「実証哲学」においては、諸科学の統一を果たすのは「数学」ではなく「社会学」となるのである。

こうして今回の研究でわれわれは、『実証哲学講義』において、コントの「実証哲学」が、実証主義の通例に反して、非科学主義的かつ非数学主義的に、どう形成されていったか、その内実を、大方、把握し提示しえたと考える。さらに、このことをより徹底して『実証哲学講義』に見ていくことは必要であり、そのことは今後も継続して行われていくであろう。ただ、科学主義的かつ数学主義的な実証主義がますます猛威を振るっている一方で、世界のアナーキーな状態が深刻さを増しているなかで、われわれとしては、非科学主義的かつ非数学主義的なコントの「実

証哲学」について、(第一次世界大戦が勃発した)1914年に、ブラジルの実証主義教会が発したという次の言葉、すなわち、「兄弟が殺しあう現在の破局は、とくにパリで実証主義の宣伝がおくれた結果である」(アラン『イデー』)の当否を、今更ながら真剣に探ることを今後行っていくことができればと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安孫子信	4. 巻 18
2. 論文標題 「ベルクソンをめぐって 『道徳と宗教の二つの源泉』 第四章の読解 」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『法政哲学』	6. 最初と最後の頁 39 - 52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安孫子信	4. 巻 20
2. 論文標題 「インターナショナルからトランスナショナルへ 国際日本学の新しい展開」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『国際日本学』	6. 最初と最後の頁 3 - 19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takafumi Ishiwatari	4. 巻 24
2. 論文標題 Entre l'individu et la societe: l'anthropologie d'Auguste Comte	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 86 - 95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masahito Hirai	4. 巻 24
2. 論文標題 La critique de la physique laplacienne par Auguste Comte: Le cas de capillarite	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 179 - 190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件（うち招待講演 17件 / うち国際学会 20件）

1. 発表者名 杉本隆司
2. 発表標題 「産業主義と実証主義の思想史的起源へ サン=シモンとコントの訣別をめぐって」
3. 学会等名 日仏経済学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 「デカルトとパスカル オーギュスト・コントを手がかりにして」
3. 学会等名 法政哲学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shin Abiko
2. 発表標題 “Une sociologie inachevee chez Bergson ”
3. 学会等名 Project Bergson in Japan（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hisashi Matsui
2. 発表標題 "La notion de milieu dans la philosophie biologique d' Auguste Comte et la psychologie de William James"
3. 学会等名 Journes d' etude de l' Atelier de la philosophie francaise du XIXe siecle（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Takashi Sugimoto
2. 発表標題 "Theorie de confiance de la politique positive de Comte"
3. 学会等名 Journnes d'etude de l'Atelier de la philosophie francaise du XIXe siecle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shin Abiko
2. 発表標題 " La portee philosophique des deux lois sociologiques de Comte "
3. 学会等名 Journnes d'etude de l'Atelier de la philosophie francaise du XIXe siecle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kotaro Ono
2. 発表標題 " Comte et Bergson - L'industrie et la democratie "
3. 学会等名 Journnes d'etude de l'Atelier de la philosophie francaise du XIXe siecle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Annie Petit
2. 発表標題 " La portee historique du Cours de philosophie positive d'A. Comte : tensions et paradoxes "
3. 学会等名 Journnes d'etude de l'Atelier de la philosophie francaise du XIXe siecle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Laurent Clauzade
2. 発表標題 "L'etude de l'esprit humain dans l'oeuvre de Comte : une systematisation a posteriori de la philosophie"
3. 学会等名 Journées d'étude de l'Atelier de la philosophie française du XIXe siècle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masaru Yoneyama
2. 発表標題 "Une etude sur le langage dans la philosophie positive"
3. 学会等名 Journées d'étude de l'Atelier de la philosophie française du XIXe siècle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tonatiuh Useche Sandoval
2. 発表標題 "A Rome par le detour de la science"
3. 学会等名 Journées d'étude de l'Atelier de la philosophie française du XIXe siècle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masahito Hirai
2. 発表標題 "Le gouvernement intellectuel de la société"
3. 学会等名 Journées d'étude de l'Atelier de la philosophie française du XIXe siècle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Thierry Hoquet
2. 発表標題 "Le veritable esprit de la science des corps vivants"
3. 学会等名 Journnes d'etude de l'Atelier de la philosophie francaise du XIXe siecle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Michel Bourdeau
2. 発表標題 "Le devenir philosophie de la science"
3. 学会等名 Journnes d'etude de l'Atelier de la philosophie francaise du XIXe siecle (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 "Nishi Amane et tetsugaku; la question de traduction"
3. 学会等名 国際シンポジウム Les concepts en traduction japonaise (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安孫子信
2. 発表標題 「ヘルクソンをめぐる 『道徳と宗教の二つの源泉』 第4章の読解」
3. 学会等名 法政大学文学部哲学科最終講義 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hisashi Matsui
2. 発表標題 Henri Bergson le pragmatiste jamesien
3. 学会等名 The Global Bergsonism Research Project (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉本隆司
2. 発表標題 合評会『フランス19世紀とスピノザ』
3. 学会等名 スピノザ協会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平井正人
2. 発表標題 Genese de la biologie cmtienne: vitalisme, mecanisme, positivisme
3. 学会等名 Comprendre les dynamiques vitales (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石渡崇文
2. 発表標題 Esthesiologie d'Erwin Straus
3. 学会等名 Comprendre les dynamiques vitales (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井久
2. 発表標題 La vie et le milieu chez Bichat
3. 学会等名 Comprendre les dynamiques vitales (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井久
2. 発表標題 Lire "L'organe de la pensee" de Laurent Clauzade (La physiologie cerebrale)
3. 学会等名 La philosophie de la biologie chez Auguste Comte (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石渡崇文
2. 発表標題 Lire "L'organe de la pensee" de Laurent Clauzade (Une phrenologie sociologique)
3. 学会等名 La philosophie de la biologie chez Auguste Comte (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川悦宏
2. 発表標題 Lire "L'organe de la pensee" de Laurent Clauzade (La theorie cerebrale et la morale)
3. 学会等名 La philosophie de la biologie chez Auguste Comte (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 菊池理夫, 有賀誠, 田上孝一, 近藤和貴結, 城剛志, 石塚正英, 杉本隆司, 渡辺幸子, 奥田恒, 見崎史拓, 田中将人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 254
3. 書名 『ユートピアのアクチュアリティ 政治的想像力の復権』	

1. 著者名 川口茂雄、越門勝彦、三宅岳史、安孫子信、杉本隆司、村松正隆、相澤伸依、赤塚弘之、磯直樹、伊多波宗周、伊東俊彦、井上偵男、井柳未紀、上尾真道、上垣豊、上原麻有子、植村玄輝、梅田孝太、江頭大蔵、大沢健夫他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 442
3. 書名 現代フランス哲学入門	

1. 著者名 石塚正英研究生活50年記念誌編集委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 社会評論社	5. 総ページ数 159
3. 書名 感性文化のフィールドワーク	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉本 隆司 (Sugimoto Takashi) (80509042)	明治大学・政治経済学部・専任講師 (32682)	

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村松 正隆 (Muramatsu Masataka) (70348168)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	松井 久 (Matsui Hisashi) (60834843)	明治大学・研究知財戦略機構・研究推進員 (32682)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	長谷川 悦宏 (Hasegawa Etsuhiro)		
研究協力者	石渡 崇史 (Ishiwatari Takahumi)		
研究協力者	小野 浩太郎 (Ono Kotaro)		
研究協力者	平井 正人 (Hirai Masahito)		
研究協力者	高橋 正樹 (Takahasi Masaki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松本 力 (Matsumoto Tsutomu)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 Journées d'étude de l'Atelier de la philosophie française du XIXe siècle	開催年 2022年～2023年
国際研究集会 La philosophie de la biologie d'Auguste Comte	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関